

迷い路

小川未明

青空文庫

二郎は昨夜ゆうべ見た夢が余り不思議なもので、これを兄の太郎に話そうかと思つていましたが、まだいい折おりがありません。昼過ぎに母親は前の圃はたけいもとで妹を相手にして話をしていたから、裏庭へ出て兄を探たずねると、大きな合歡ねむの木の下で、日蔭の涼しい処で黙つて考え込んでいますのであります。二郎は心配そうに傍に寄り添うて、「兄さん、何を其様そんなに考えているんです、何処どこか悪いんでありませんか。え、兄さん。僕は昨夜不思議な夢を見たから話そうと思つて来たんです。」

兄は驚いた風で、少し急せきこ込んで、

「お前は、どんな夢を見たんだ。」

と問いました。二郎は余り兄の狼狽うろたえたのを意外に思ったけれど、声を一段と低めて、昨夜の夢のあらましを話しました。

「兄さん！ 僕の真実ほんとうの母さんは生えているよ。隣村の杉の森の中に住んでいて、僕が行って遇おうた夢を見たよ。大変に喜んで可愛がつてくれたよ。僕は今のお母さんも好きだけど、死んだ母さんも好きだなあ。」

と語る。と兄は顔の色を紅く染めて、

「二郎や、僕もそれと同じい夢を見た。母さんは初め遇あうた時に知しらなかつたが、なんでもよく似ている人だと思つて、取とり縄すつて見ると母さんであつたのだろう……。」

「うん、そうだったよ。じゃ兄さんも見たのか。」

「ああ、僕も見たいよ。」

「じゃ、これは大変だ！ 大変だ！」と二郎は氣の狂うたように躍り上りました。

「何するんだ馬鹿ッ！」

「何馬鹿だ？」と二郎は嬉しいやら、懐かしいやら、不思議やらで暫時心の狂って、其処にあつた棒で兄を擲りました。

「痛い！ 痛い！ ああ痛い！……」と太郎は泣き出して「母さん！……二郎ちゃんが打つた……エン、エン……」と泣き出した、母親はこの時家にいたものと見えて、早速この泣声をききつけて駆けて来ました。今の母親は継母ままははでしたけれど、それはそれは実の母親も及ばない程に二人を可愛がつてくれたのであります。

ですから二人は今の母さんをば前の母さんを慕うように慕っています。

母親は物優しく「まあ二郎ちゃん、お前さんは何をしだい、何もしない兄さんを打ぶつなんて、お父さんがお帰りですと叱お叱られたら何どうなさいいます。さあお詫わびをなさい。」
と言いました。

二郎は物やさしく母親に言われて、心が少し落おち付ついたもので、初めて自分が悪かったと知ったから、太郎に向つて、

「兄さん、堪忍しておくれ。」と頭を下げました。太郎は黙ってしやくり泣きをしていますと、母親は、

「太郎や何処か傷は付かなかつたの、もう痛みはとまって。」

と、親切に言われるので、この時太郎も二郎も斯こんな様優しい母さんがあるのに、前の母さんを恋しく思うのは罰ばちが当るように思われて、二人は昨夜の夢の話をもつと母さんに言われませんでした。母親は夕飯の仕度をするからといって、又家の内へ入りました後で、二郎は「兄さん、痛くはないか……」と言って伏目になつて足あしもと下に落ちてゐる棒ひとみに眸ひとみを移しました。

兄は黙つて頭かむりを振つて、「もう痛くはないよ。」と寂しそつに笑顔を作つたのであります。

太郎は十二歳で二郎は十歳であります。その晩二人は寢床へ入つてから、明朝あした自分達を生んでくれた旧もとの母さんを尋ねに三里彼あ方の、隣村の杉の木の森たずを探ねに出る約束をしたのです。夜が明

けますと太郎と二郎と二人して、弁当を腰に下げて、杖を^{もっ}持て、草鞋^{わらじ}を^は穿いて、同じ、扮粧^{いでたち}で出掛たのであります。

橋を渡り、畑や、圃の中の小道を過ぎて、目ざす隣村の村端^{はず}れに來かかりますと、広い野原の中に一筋の道が走っています。二人は昨夜の夢に見た通りの道ですから、驚きました。

「二郎や、この道をお前も夢に見たかい。」

「ああ、やっぱりこの道を行つたんです。」

「この、杉林も通つてまだまだ奥へ行つたよ。」

「僕も……あれ、兄さんこの道は此^{ここ}処で二筋に分れてしまつた。」

今迄二人の歩いて來た、道が二筋に分れて一つは広い道幅^{たいら}の平な道であります、それに比べると他の一筋は小石のごろごろと転

つている、けんそ 険岨の道で草の中に半分隠れていて余り人の通らない道のようにあります。

「二郎やこの広い道を行くんだよ。」

「いいえ兄さんこの細い道を行いくんですよ。」

「だって、僕は夢にこの道へ行つたのを見た。」

「僕はこの道を行つたよ。」

「この道の方が真ほんとう実だ。」

「いいえこちらが真実だ。」

「僕は此方こちらへ行く。」

「僕は此方へ行きたいな。」

「二郎ちゃんこの方が歩きよくていいや。」

「兄さん、此方へお出いでよ。」

「いやだ！」

「じゃ、私わしは一人で行くわ。」

兄は怒った、さっさつと広い道の方を歩いて行きます。今は二郎も意地張ばって、己おれは此方へ行くと歩いて、細い道を辿り辿り、一丁ちようも来て、兄の後姿を見送った時には、いつか峠さへぎに遮られて、道は曲まっていて、兄の姿は見えなくなつたのであります。又一二丁も来ると道がだんだん峻けわしくなります。

傍あたりの雑木林で四十雀しじゆうからや、山雀やまがらが鳴いています。ただしんとして四辺あには風の折々、さわさわと木の葉の鳴る音ばかりで溪間たにまにひぐらしの鳴くのが聞えて、なんだか非常に心細くなつて、後へ戻つ

て兄を追うかと思いました。その時、道端^{みちばた}の草に埋もれている石地蔵様が「さっさつと真直^{まっすぐ}に行きやれ行きやれ」と物を言わっしやる。二郎はこれこそきつと神様のお告げだと思つて、この道さえ真直に行けば恋しい、母^かあさんに遇われるのだと勇氣を出して歩きました。又二三町きて、やはり道^{あて}が当なく、草原につづいているばかりで、目ざす森も見えませんが、人家もないのでがっかりとして、もと来た道を帰ろうかと立止つて考えますと何処^{どこ}からか山鳩が一羽飛んで来て、ちょうど頭の上の木の梢にとまつて、「二郎さん二郎さん早くお出でよ、トテツポーツポー、脇見をせんでお出でなさい。トテツポーツポー」と二郎に力づけ、又何^{いずく}処へか去つたのであります。二郎はやつとのことので平の

場所へ出たかと思うと広い野原であります。

昔は大名か何かの、奇麗な御殿があつた所だと見えて、大きな

礎石いしや、瓦かわらの欠かけや、石垣などが残っています。その荒れた城跡に

草の茫ぼうぼう々と生えた中で、夕暮方の空を眺めて一人の瘦やせた乞食が

胡弓こきゆうを鳴らして、悲しい歌を歌っていました。二郎は物怖ろし

くなつて、乞食の知らない間に通り返けようと駆け出しましたが、

乞食は別に此方を振向こうともせずに、やはり疲れた風で泣くよ

うな胡弓を鳴らしたのであります。二郎は昼うちの中に弁当を食

べ尽して、何か食物たべものを買うところはないかと思つて、考えてい

ますと、遠くの方で太鼓の音が聞えているので、早速その方こころざしを志

して道を急ぎました。

案の如く彼方あちらに大きな森が見えたのであります。二郎はこの時
 昨夜の夢を思い出して、少しもこの辺の景色が違っていないこと
 をたしかめました。「ああ、兄さんは何処へ行つたろう。」と兄
 の身の上を案じながらも、早く母さんに遇おうと思う一念で森の
 燈ともしび火の見えるのをそれと思つて駆けて参りました。だんだん暗
 い大きな森の中へ入つて行きますと、月の光も差さず、物凄い風
 の音が聞えて、始めのうちは狐にばかされたと思つていましたが、
 その中に遽たちまち目の前に賑やかな、お祭の景色が見えました。紅、
 青、紫色の燈火が星のように輝やいて、行手ゆくての道の両側には見みせも
 物店ものや、食物店が、それはそれはちようど九段の招魂社しょうこんしゃの
 祭りに行つたように奇麗に居並んでいて、其処そこを往来ゆききするお姫様

や、小供こどもの姿が手に取るように見えます。しかし余程隔っている
と見えて物音は何も聞えず、ただ立派な着物の縞や、人の顔など
が朧おぼろに見えるばかりで、眠むそうな太鼓の音が時々、どんどん
と聞えるばかりであります。二郎はこれが母さんのいなさる処か
と心のうちで思い込んで、早く行つてその祭を見たいと駆け寄り
ますと、ちらりとお母さんの笑顔が幻まぼろしに見えたかと思うとぱつ
としてその影は何処へか消えてしまいました。

二郎は魂の抜け去つたように茫ぼうつとして佇たたずんでいますと、頭頭の
上の大きな杉林に風の音が物凄く、月の光りがちらちらと洩れて
梟ふくろの啼なき声こゑが聞えます。もはや堪こたえられんで二郎は泣出なそうとし
た時に、先刻さつきのみすばらしい乞食こゝろが現あらわれて、私わががお家うちへ連つれて行

つて上あげましよう。と先に立って、例の哀しい胡弓を鳴らしながら
今来た道をもどって行くのであります。二郎は恐る恐る、「母さ
んに遇あいたいが、お前さんは、母さんのいるところを知らないか
。」と聞きくと乞食は、「母さんのところへ連れて行って上あげましよう
。」とやはり今来た道を帰るのであります。二郎は堪えかねて、
「小父おじさん、真ほん実とうの母さんは何処どこにいましよう、僕は真実の母
さんに遇あいに来たのだよ。」
と、言うのと乞食いづかしは不いづかし審しんそうな顔かおつき付つきをして、立止たつて二郎の顔
をつくづくと眺ながめて、

「真実の母さんてば……二郎さん、お前さんはどうかしています
ね、きつと狐きつにばかされて此処こゝへ来たのですよ。」

と、後は何かぶつぶつと口の中でひとりごと独言をいうて、草藪の中を分けて行きます。二郎は悲しくなつて、涙ぐんで黙つて後についてまいりました。夜嵐は杉の木の梢に鳴り渡つて、泣くように悲しい音ねを出す胡弓は、たえだえに聞かれるのであります。

「二郎ちゃん！」と一声何処かで声がする。二郎は歩みを止めて佇たずみました。誰たれか自分の名を呼んだなと思ひましたけれど、それつきり聞こえませんでした。余程来たかと思ふ時分に杉林の奥の方で太鼓の音おとがまたしても聞こえます。振り向くと、またしても、紅、青、紫の燈火が美しう輝やいていて、お祭りの賑かな景色が見えて、人通りの混こ雑みている中に此方を向いて手招きをする女はたしかに自分の死んだ母親の顔であります。

「お母さん！」と、思い存分に叫わめきますと、その声は木精こだまにひびいて確かに母さんの耳にも聞えたのです。乞食は不意ふいに後を向いて「やかましい。」と言いいざまに持つてゐる胡弓で二郎を力存分に打ちました。胡弓の柄えはぼつきりと三つばかりに折れたかと思うと、物凄い夜嵐の音も、怒いかれる乞食の姿も美しいお祭の景色も総すべて消えてしまつて、いつしか二郎は月つき明あかりの下に我が家の前に立つていたのであります。

太郎は途中からよして、自分よりは疾とつくに家に帰つていて、二郎の帰るのを待ちつつ母や妹と心配しながら、果物などを食べていたところであります。母親だけは果物も何も食くんで寂さびしそうな顔付をしていました。

これから兄弟とも今の母親の言うことをきいて孝行を^{つく}尽しまし
て、母も益々^{ますます}二人を愛したそうであります。

青空文庫情報

底本：「文豪怪談傑作選 小川未明集 幽霊船」ちくま文庫、筑
摩書房

2008（平成20）年8月10日第1刷発行

2010（平成22）年5月25日第2刷発行

底本の親本：「緑髪」隆文館

1907（明治40）年1月2日発行

初出：「読売新聞」

1906（明治39）年8月12日号

※「行くん」と「行《いく》ん」の混在は、底本通りです。

入力：門田裕志

校正：坂本真一

2016年11月21日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

迷い路

小川未明

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>